

オガサワラグワ里親計画

東京から南に900 km以上離れ大陸と一度も繋がったことのない小笠原諸島には、偶然辿り着いた生物が独自に進化し、多くの固有種が生息しています。東洋のガラパゴスともいわれ、2011年には世界自然遺産に登録されました。固有種の宝庫である小笠原諸島は、実は、絶滅危惧種の宝庫でもあり、人間活動に伴う直接的・間接的影響により多くの固有種が絶滅の危機にさらされています。

オガサワラグワも絶滅の危機にある固有種のひとつで、父島、母島及び弟島に分布し、樹高20m以上に成長する雌雄異株の樹木です。材が家具や工芸用に賞用され高値で取引されたので集中的に伐採され、ほぼ伐り尽くされてしまいました。これに加えて、父島と母島では、薪炭材用に導入されたアカギが旺盛に成長してオガサワラグワの生育地を奪い、養蚕用に導入され野生化したシマグワと容易に交雑するので純粋なオガサワラグワの種子が出来にくく、天然更新の可能性は極めて低いと考えられています。弟島では、岩石地に生育し、稚幼樹がほとんど見られません。現在も成木の衰弱枯死が進み、3島合わせて百数十個体が残存するのみとなっています。

林木育種センターは、このようなオガサワラグワの危機的状況の下、平成16年から林木ジーンバンク事業の一環として残存個体を組織培養等で増殖し、培養シュートや鉢植え苗で生息域外保存を進めてきました。現在、既に現地では枯死した個体を含む約100個体のクローンを保存しています。また、保存したクローンから再増殖し、父島で野生復帰試験を進めるとともに小笠原諸島返還50周年(平成30年)の記念事業の一環として小笠原村が取組んでいる「オガグワの森」と「母島の森」に培養苗を提供し、植栽しました。

オガサワラグワ里親計画は、絶滅危惧種オガサワラグワを各地の植物園に分散して展示・保存することで希少な遺伝資源を確実に将来に残すとともに、植物園を訪れる多くの人にオガサワラグワ



写真 オガサワラグワ苗木の受渡し

や小笠原諸島の自然について知ってもらうことを目的として、平成31年2月に開始しました。この里親計画は、林木育種センター、日本植物園協会、小笠原村の3者の共同事業です。日本植物園協会には、国、地方自治体、大学、製薬会社などの全国約110の植物園が所属し、オガサワラグワの展示を希望する植物園が里親になります。里親の第1号は東京都立神代植物公園で、平成31年4月26日に同園で式典が開催され、父島、母島及び弟島産の雌木雄木各1個体計6個体のクローン苗木が同園に渡されました(写真)。

この里親計画により、植物園という整った施設で植物育成のプロの手によって複数の場所に分散保存されるので、残存木や植栽木等が枯死した場合のバックアップとなり、希少な遺伝資源の滅失のリスクを軽減することができます。また、里親計画には、入園者にオガサワラグワや小笠原諸島の自然について理解を深めてもらうため、それらに関する展示や公開セミナーの開催も含まれています。

オガサワラグワ里親計画は始まったばかりです。これから、できるだけ多くの植物園に里親になっていただきを考えています。

(遺伝資源部 板鼻 直榮)